

## 鈴木三重吉宛書簡からみる「倫敦塔」

—「単に美といふ丈では満足出来ない」—

はじめに — 鈴木三重吉宛書簡を手がかりに —

夏目漱石「倫敦塔」は、倫敦留学中の「余」（漱石自身を髣髴とさせる）が（倫敦塔）を訪れる話であり、（倫敦塔）の中では様々な空想が繰り広げられる。しかし、下宿の主人によってその空想が壊される結末となっている。何故、（倫敦塔）の空想は最後に壊されてしまったのか（あるいは壊さねばならなかったのか）。この疑問を、今回は鈴木三重吉宛書簡を手がかりにして考えてみたい。漱石研究において引用されることの多い有名な書簡だが、「倫敦塔」との関連は触れられてこなかったように思われる。

只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではないけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてははいけない。此点からいふと単に美的な文字は昔の学者が冷評した如く閑文学に帰着する。俳句趣味は此閑文学の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に疎ころんで居る様では到底動かさせない。然も大に動かさざるべからざる敵が前後左右にある。苟も文学を以て生命とするものならば単に美といふ丈では満足が出来ない。丁度維新の当土勤王家が困苦をなめた様な了見にならなくては駄目だらうと思う。間違つたら

神経衰弱でも気遣でも入牢でも何でもする了見ではなくては文学者になれまいと思ふ。文学者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相違かる様な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る為めだ杯とは云ふては居られぬ進んで苦痛を求めぬ為めではなくてはなるまいと思ふ。

君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文学者だと済まして居る様になりはせぬかと思ふ。現実世界は無論さうはゆかぬ。文学世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此点に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文学者ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文学に入ると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰抜文学者の様な気がしてならん。

破戒にとるべき所はないが只此点に於て他のぬく事数等であると思ふ。然し破戒は未ダシ。三重吉先生破戒以上の作ヲドンく出シ玉へ 以上  
(明治39年10月26日付)

この書簡では、「草枕」のような俳諧的文学のみならず、「維新の志士の如き烈しい精神」で命のやりとりをするような文学をやつてみたという漱石自身の文学観を語るとともに、三重吉にも「千鳥」のような夢の世界のみならず現実の重みを感じさせる作を書くようにと激励している。

山根 由美恵

安藤久美子氏は「この有名な書簡は、漱石が『草枕』のような美的境地から『二百十日』『野分』へと、現実空間を描く小説を書くに至る道筋を物語っている」、「『草枕』以降『三四郎』に到るまでの漱石は『濛虚集』『草枕』の夢幻的なものと、『野分』のような現実的、文明批評的なものが分裂して、夢と現実の接点にある小説時空を創り出す模索を続けているといえる」と捉えている。

しかし、この書簡の骨子の一つである「美といふ丈では満足が出来ない」という態度は、「倫敦塔」にも見られるのではないだろうか。本稿は、「倫敦塔」の空想を壊した意味を、「単に美といふ丈では満足が出来ない」という作家の意思の現れの一つとする。つまり、三重吉宛書簡から「倫敦塔」を逆照射してみたい。

なお、ここで考える「美」とは、「只きれいにうつくしく暮らす」ことや、「文学者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相違かる様な小天地ばかりに居」る場として考えることとする。

## 一 「倫敦塔」と鈴木三重吉宛書簡のあいだ

### 1 書簡からみる漱石の軌跡 — 明37〜39 —

もちろん、三重吉宛書簡は「倫敦塔」から一年半後のものであり、ストレートに結びつけることはできない。はじめに「倫敦塔」と三重吉宛書簡の間の漱石の意識を追ってみた。

明治37年12月から38年1月にかけて、野間真綱氏に「倫敦塔」「猫」に関する書簡を寄せている。「倫敦塔は未だ脱稿せず然しものになりまず御一覽の上是非ほめて下さい（明治37年12/19）」、「倫敦塔は出

来上つたあとから読んでみると面白くも何ともない先便は取り消す（明治37年12/21）」、「猫伝をほめてくれて難有いほめられると増長して続篇続々杯をかくきになる実は作者自身は少々鼻について厭気になつて居る所だ読んでもちつとも面白くない（明治38年1/1）」、「君がほめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持ちがする。然し世に稀なる文学者は少々驚いたね（明治38年1/19）」。

野間氏宛の書簡は、純粹に書く喜びとそれを褒められることの喜びにあふれている。次に挙げる皆川正禧氏宛書簡（明治38年1/20）では、より詳しい自解があり、興味深い。

倫敦塔の御批評難有候実は稿を草する折は多少逆上の気味にて自分でも面白いと思候脱稿の上通読したらいやな処が多く且つ今一いきと云ふ処で気が抜けて居る様で我ながらいやに成つて居たのです。然る処本日奇瓢先生から手紙をくれて大変ほめてくれたので又少し色気が出た処へ君の端書が来たものだから当人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて来ました。

ダンテの句は仰せの如く故意らしく候。あれはあまり句が長すぎる為もあります。何だか知つて居る事を気取つて無理に挿入した様な感じがある。少し気ざと思ふ。あの句を二句位につめれば色彩として存してもよからうと思ふ如何。番兵を褒めてくれ手はないと思つて居たら飛んだ処から喝采が出て大いに面目を施こす訳です。首斬りの段は一番面白いかね。僕自身はあそこが一番よく書けたとも思つて居らん。

倫敦塔で君を免職させるのは御気の毒だから当分君を麻過させる様なものはかゝない積りに候。二月のほとゞぎすには猫の続きが出ます是は健康に害のある程のものではないから読んで下さい。

この書簡で注目したいのは、「倫敦塔」執筆時「逆上」気味であつ

たこの言葉であり、書くことに夢中になっていたことがわかる。また、対読者意識はあるが、自分の身近な、換言すれば漱石と知的教養を共有している人に読んで(評価して)もらいたかったことが見えてくる。この「逆上」という態度からか、漱石は「猫」よりも「倫敦塔」に自信を見せている。同様の態度は、その後の書簡にも散見される。

・明治38年2/8 (野間真綱宛) 抜粹

皆川君は倫敦塔はほめてくれるが猫は宗旨違ひだからだめだらう。猫の材料も出来たから又あとをかきたいが閑がないから四月位にのせる事に仕様と思ふ

・明治38年2/13 (皆川正禧宛) 抜粹

君が大々の賛辞を得て猫も急に鼻息が荒くなった様に見受候。続篇もかき度杯と申居候。いずれ四月はホト、ギスが壱百号ださうですから其時迄に椽側で趣向を考へて置くと申す話です。日本文壇の偉観は少々恐縮す(る)から御返却したいと思います。皆川さんは倫敦塔の様なものではなくては御気に入らないかと思つたら吾輩の様なものも分るえらいと猫は大喜悦に御座候。同じ駒込区内にかう云ふ知己があれば町内の奴が野良と云はうが馬鹿猫と申さうが構ふ事はないと満足の体に見えます。此猫は向三軒両隣の奴等が大嫌ださうです。

これら二つの書簡では、「猫」よりも「倫敦塔」の方が一段上と考えていることが明確に窺える。この頃から積極的に碧梧桐や鏡花の評(野村伝四氏宛 明治38年3/14)を行っているが、「僕杯のいふ事は門外漢の言葉として彼らは首肯しないだらう」とも述べ、自らがまだ傍流であることを認識している。

次は『濛虚集』連作の自解である。

・明治38年4/27 (若杉三郎宛) 抜粹

御手紙拝見仕候此方も存外の御無沙汰ゆるし下され度候拙作御懇篤なる御批評を蒙り難有存候大体に於て大兄の御考は正鵠を得たるものと存候盾は礼服塔は袴猫は平常服の喩尤も得吾意申候。

・明治38年12/3 (高浜虚子宛)

ある人云ふ漱石は幻影の盾や薙露行になると余程苦心をするさうだが猫は自由自在に出来るさうだ夫だから漱石は喜劇が性に合つて居るのだと。詩を作る方が手紙をかくより手間のかゝるのは無論ちやありませんか。虚子君はさう御思ひになりませんか。薙露行杯の一頁は猫の五頁位と同じ労力がかゝるのは当然です。

この他に、野村伝四宛(明治38年6/27)の『ホトトギス』と『明星』の評、伊藤左千夫宛(明治38年12/29)の『野菊の墓』への絶賛、森田草平宛(明治39年2/15)における指導などがある。「猫」が爆発的に受け入れられ作家としての名が売れつつある。こういった状況は漱石をして作家としての意識を芽ばえさせている。

ここで押さえておきたいのは、「猫」への労力と『濛虚集』への労力は違ったものであり、後者のほうが力作であることを明言していること、「倫敦塔」への確かな自信が見られることである。「倫敦塔」は漱石にとって、この時点において核となっているテキストと言えよう。ここで転機が訪れる。藤村「破戒」の発表である。

・明治39年4/1 (森田草平宛) 抜粹

破戒は二三日前買いました。先日紅緑が来て破戒の著者は此著述をやる

為に裏店へ這入つて二年とか三年とか苦心したと聞いて急に島崎先生に  
 対し「て」も是非一部買はねばならぬ氣になりすぐ買つてきました。是  
 は只買つて来たのです。面白くてもつまらなくても構はない買つてきた  
 のです。夫から半分よみました。第一氣に入つたのは文章であります。  
 普通の小説家の様に人工的な余計な細工がない。そして真面目にすら  
 く、すたくく書いてある所が頗るよろしい。所謂大家の文辞の様に装  
 飾沢山でないから愉快だ。夫から氣に入つたのは事柄が真面目で、人生  
 と云ふものに触れて居ていたづらな脂粉の氣がない。単に通人や遊蕩児  
 や所謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居るからです。まだ後半  
 はよまないから批評は出来ないが恐らく傑作でせう。今迄の日本の小説  
 界にこんな種類のものはなからうと思ふのです。只一篇のモーチーフが  
 少々弱いかと思ふ。

軽薄なものばかり読んで小説だと思つて居る社界にこんな真面目な  
 が出現するのは甚だうれしい事と思ふ。

### 明治39年4/3 (森田草平宛) 抜粋

破戒読了。明治の小説として後世に伝ふべき名篇なり。金色夜叉の如  
 きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多  
 く小説を読まず、然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒な  
 らんと思ふ。

### 明治39年4/4 (高浜虚子宛) 抜粋

藤村の破戒といふのを読んで御覽なさい。あれは明治の小説として後  
 世に伝ふるに足る傑作なり。金色夜叉杯の類にあらず。

人生の眞実を直実に描いた「破戒」は、文壇のみならず、漱石にも  
 大きな衝撃を与えた。漱石は「破戒」を強く意識し、俳諧的文芸「草  
 枕」を書きながらそれだけでは駄目だと考えるようになる。三重吉

宛書簡における「維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい」  
 という漱石の思ひは、「破戒」と密接に関わっている。

しかし、漱石の「維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみた  
 い」という思ひは「破戒」の影響が全てではない。倫敦留学中から、  
 人生の眞実を掴みたいと願っていた。

## 2 日記・断片からみる漱石の道程

### — 明33~35 (倫敦留学から執筆まで) —

次例は、倫敦留学中に中根重一氏にあてた書簡であり(明治35年3  
 /15)、精神的に参っていたことを如実に窺わせるものである。

私も当地着後(去年八月頃より)より一著述を思ひ立ち目下日夜讀書  
 とノートをとると自己の考えを少し宛かくのとを商賈に到候同じ書を著  
 はすなら西洋人の糟粕では話らない人に見せても一通はづかしからぬ者  
 と存じ励精到居候然し問題が如何にも大問題故わるくすると流れるかと  
 存候よし首尾よく出来上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷か  
 と存候出来上らぬ今日わが著書杯事々敷吹聴到候は生れぬ赤子に名前を  
 つけて騒ぐ様なものに候へども序故一応申上候先づ小生の考にては「世  
 界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべき  
 やの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化  
 の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸元素を解剖し其聯合して発  
 展する方向よりして文芸の開花に及す影響及其何物なるかを論ず」る積  
 りに候斯様な大き(な)事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学  
 にも進化論にも關係致候故自分ながら其大胆なるにあきれば候事も有之候  
 へども思ひ立候事故行処迄行く積に候斯様な決心を致候と但欲しきは時  
 と金に御座候日本に歸りて語学教師杯に追つかはれて候ては思案の暇も  
 讀書のひまも無之かと心配致候時々は金を十万円拾つて図書館を立て其

中で著書をする夢を見る杯愚にもつかぬ事に御座候

後の『文学論』への意気込みがここで書かれているが、「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸元素を解剖し其聯合して発展する方向よりして文芸の開花に及す影響及其何物なるかを論ず」といった、あまりにも大きな問題を漱石は真剣に考えている。抽象的な理論を、世界観・人生観などと結びつけ、がむしゃらに追求しており、後に「夏目狂セリ」と評される余裕のない態度となっていた。その様子は、『文学論』では「余は下宿に立て籠りたり。(略)一切の文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文学は如何なる必要あつて、此世に生れ、発達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり」と記される。

しかし、『文学論』は成立することはなく、漱石は失意のまま帰国する。帰国後、妻・鏡子は知り合いの呉博士に精神鑑定を依頼し、博士は漱石を一生直ることはない精神病と診断した。妻はこれを信じ、精神病者として扱っていた。その頃の断片には、漱石の深い苦悩が見える。「倫敦塔」研究でよく取り上げられる断片十九Dでは「凡ての男を呪ひ、凡ての女を呪ひ凡ての草凡ての木を呪ふ凡ての生けるものを呪ふ三世を坑中に封じ大千世界を微塵に摧き去る地球破壊の最終日我胸中にあり」とある。帰国して周りから「神経衰弱」と言われてき

た頃の断片であり、執筆という転機が訪れるまで、漱石の心がかなり病んでいたことを物語っている。

倫敦の地で文学理論を構築することで世界観・人生観を得ようとしていた漱石、『文学論』の序でそういった過去の自分を「血を以て血を洗ふが如き手段」と捉える漱石、「破戒」に衝撃を受け「維新の志士」の精神で文学をやってみたいと語る漱石の間には断絶は見られない。「破戒」の衝撃(苦悩をリアルに描く小説)により、作者は倫敦留学当時の文学理論を極めようとしていた自分「社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり」と考えていた自身自身を認識し直したと言えないだろうか。この間の文学観にはズレはないと考える。

それでは「美といふ文では満足が出来ない」という態度はどうだろうか。倫敦留学直前の断片に注目してみたい。

#### ・断片四A 明治33年(船中) 抜粋

The sea is lazily calm and I am dull to the core, lying in my long chair on deck. The leaden sky overhead seems as devoid of life as the dark expanse of the waters around, blending their dullness together beyond the distant horizon as if in sympathetic stolidity. While I gaze at them, I gradually lose myself in the lifeless tranquillity which surrounds me and seem to grow out of myself on the wings of contemplation to be conveyed to a realm of vision which is neither aetherial nor earthly, with no houses, trees, birds and human beings. Neither heaven nor hell, nor that intermediate stage of human existence which is called by the name of this world, but of vacancy, of nothingness where infinity and eternity seem to swallow one in the oneness of existence, and defies in its vastness any attempts of description. Suddenly the shrill sound of a bell, calling us to lunch, awakened me to the stern reality, after a short short syncope of the

senses, mercilessly cutting off that delicate link which connects man and infinity at some unexpected and unforeseen moments, and permits man in the very midst of passions and turbulence to peep into the Kingdom of absoluteness, the realm of transparency, the world of real activity — an activity with no motion and no rest from whence we came, whither we tend and where we live even at present in this phenomenal existence which [we] call life.

## 【漱石全集 注釈より】

（大海は悠然として静かであり、余は心の底まで倦怠を覚え、甲板の長椅子に長々と身を横たえている。見上げれば曇天の天空は、四辺に広がる漆黒の海原と同じように生氣を失い、遠い水平線の彼方において、あたかも互いの倦怠感に共感するかのように海と空とが融合しつつある。余はその海と空を凝視しているうちに、余を取り巻く生氣のない静謐の中に次第に我を忘れ、ついには瞑想の翼にまたがつて我と我が身を抜け出し、幻視の郷にはこぼれてゆく。その郷は、家屋も樹木も小鳥も人間も存在していない、天上的でも地上的でもない場所である。またその郷は、天国でも地獄でもなく、そうかといって現世と呼ばれる、人間が中間的に存在する場所でもない。いわば無限と永遠が、その唯一の实在性において、人間を併呑するような、虚にして無の場所であつて、その果てしなき広大さの故に、一切の描写の試みは拒否されてしまうのである。突如、甲高いベルの音が昼食の合図を響かせて、余を目覚めさせ、しばしの感覚の仮死状態から、再び儼然たる現実に立ち戻らせた。こうして、人間と無限とを、予期せず予見もできない瞬間のうちに結合させ、激情と騒乱の真つ只中にある人間に、絶対の王国、純一無雑の世界、真に生き生きとした世界を垣間見せたあの靈妙なる絆は無惨にも断ち切られてしまった。——その世界とは、運行も休止もなく生動する世界、かつて人間がそこから出現し再びそこに赴き、いま現に生というかりその存在状態のうちに吾人が生存している、世界である。

断片四Aは、倫敦に向かう途中で書かれた断片であり、管見の限り「倫敦塔」研究で触れられてこなかった。海と空を見ていた「余」は

「幻視の郷」に運ばれ、そこで「人間と無限とを、予期せず予見もできない瞬間のうちに結合させ、激情と騒乱の真つ只中にある人間に、絶対の王国、純一無雑の世界、真に生き生きとした世界を垣間見せた」。しかしこの永遠なるものへの空想が「甲高いベル」により壊れて現実へ引き戻される。この構図は「倫敦塔」の空想と破壊の構図と呼応する。「倫敦塔」での空想とそれを破壊する構図は、明治33年の段階で漱石の中に存在していることがわかる。ここから、永遠の世界への限りない憧憬とそれに浸りきれない現実を見つめる冷徹な目差し（「美」といふ丈では満足が出来ない「精神」という二面性が窺える。

\*

これら文学への理想・書くという意思について、図式化すると次のようになる。

- ・ 倫敦留学 — 空想と破壊の意識（断片四A）、文学理論を極めようと自らを追い込む日々。「血を以て血を洗ふが如き手段」
- ・ 帰国後、東大講師 — 文学論を講義するが、学生には不評。周りから「神経衰弱」と思われ、失意の日々（断片十九D）。
- ・ 「猫」一、「倫敦塔」執筆—書くことの喜び、評価されることの喜びを感じる。「倫敦塔」の凝った位相に自信を持つ。
- ・ 「猫」の連載・『濛虚集』連作—作家意識の芽ばえ、同時代作家への意識。
- ・ 「破戒」発表—人生の真実を抉る作への意欲が芽ばえる。鈴木三重吉宛書簡で「維新の志士」の精神の強調。

鈴木三重吉宛書簡は「破戒」を抜きには語れない。しかし、大きな方向性・文学への理想は変わっていないと捉える。そして、「倫敦塔」執筆は、倫敦留学と「破戒」の間にある、もう一つ大きな転機である。作者は何度も「猫」と『濛虚集』では力の入れ方が違うと繰り返し返していた。『濛虚集』第一作である「倫敦塔」は「逆上」<sup>(1)</sup> 気味で書き、その凝った位相に自信を覗かせていた。ここでは倫敦を舞台としていることから、倫敦での文学観と無関係ではありえない。

## 二 血の結晶としての〈倫敦塔〉

### 1 先行研究とテクストの基本構図

これまで倫敦留学から三重吉宛書簡までの文学観についてみてきたが、ここから「倫敦塔」の内部から空想を壊した理由を考えてみたい。

まず「倫敦塔」の先行研究について触れておく。「倫敦塔」をはじめ、『濛虚集』は、小宮豊隆が評したように「美しい世界」の作品（虚構）と捉えられてきた。<sup>(2)</sup> この「美しい世界」という評価を覆したのが江藤淳である。江藤淳は「漱石の初期の作品のうち、「吾輩は猫である」と『濛虚集』の諸短篇の間にはある種の対立関係があり」、「猫」の冷酷な諷刺の背後から浮かび上がってくる孤独な作者が、「濛虚集」のある作品の中ではその内面をたち割って、自らの内部に暗く激んでいる深淵をさらけ出しているのである」と評した。<sup>(3)</sup>

これを皮切りに、『濛虚集』と『猫』との対立関係、漱石の暗部を「倫敦塔」にみる論考が発表され、『濛虚集』の内部構造が明らかにされていく。佐藤泰正氏は『濛虚集』一巻をつらぬくものは、この

〈夢〉と〈現実〉の往還反復の力学<sup>(4)</sup>とし、相原和邦氏は「二作品の中でも、現実的傾向（現実）と超現実的傾向（夢）が交錯」し、現実的な視点の転移による相対的な批判と超現実的な視点の点出による絶対的な批判<sup>(5)</sup> 強烈な現実批判・現世批判として統一していると捉えている。

これらはどれも首肯できるが、夢の世界である〈倫敦塔〉の空想をテクストの最後で破壊した原因は、「現実批判」以外のもの、つまり「美といふ丈では満足が出来ない」精神、つまり「文学者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居」る場では満足できない精神があると私は考えている。

ここで、テクストの基本構図を抑えておきたい。まず、作中には三つの視点がある。①倫敦塔の空想を壊された倫敦の「余」（作中人物の視点）、②倫敦塔の空想を壊されたことで、より強い現実批判をする語り手の「余」（語り手の視点）、③倫敦塔の空想を壊す作者——「余」を倫敦塔という空想世界へ訪問させる。——宿屋の主人（二十世紀の人間（合理主義）を設定し、空想を破壊する（作者の視点、である。今回主に考えていきたいのは、作者の視点である。

次に、〈倫敦塔〉と二十世紀の対立の構図について、〈倫敦塔〉は現実にある倫敦塔ではなく、作者の創造した「宿世の夢の焼点」として描かれている。そのことは、〈倫敦塔〉へ行く行路を思い出せないと言ふ言葉で（倫敦塔）を二十世紀の実際の倫敦塔から切り離し、「長い手」によって引き寄せられるという超現実的な塔として描き出した点からも明白であろう。

この「夢」の内実は、歴史を煎じ詰めたもので、人の血、肉、罪が

集結した「憂いの国」は地獄である。倫敦の「余」は、この地獄に引き寄せられ、門をくぐり抜ける意志を示す。ダンテ・地獄の門について、この訳は諸氏の指摘の通り漱石が自ら訳したものである。他者訳では「我を過ぐれば憂ひの都あり」（山川丙三郎 注6）、「われを通る者は苦悩の市にいたる」（野上素一郎 注7）等、地獄の存在を示す文言が、地獄へ行こうとするものはこの門を「潜れ（くぐれ）」という意思へと変えられている。自ら地獄へ赴くかどうかの意思が問われている。

そして、「二十世紀を軽蔑する様に立つている」ことから、（倫敦塔）と二十世紀は対立している。テクストの倫敦は「蜘蛛手十字に往來する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道」と交通網の発達が大きな特徴となっており、産業革命後の近代社会としての象徴とも言える。また、その近代社会で暮らす人々の一人、番兵は「早く当番を済まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかって遊び度といふ人相」、「あるき乍ら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る」と自らの生活の享樂の想像のみ行う人間として描かれている。ここでは、個人主義と歴史を顧みない姿勢が強調されている。そして、その最たる人物として下宿の主人が造形されている。

主人が鴉が五羽居たでせうと云ふ。おや此主人もあの女の親類かなど内心大に驚ろくと主人は笑ひながら「あれは奉納の鴉です。昔しからあすこに飼つて居るので、一羽でも数が不足すると、すぐあとをこしらへます、それだからあの鴉はいつでも五羽に限つて居ます」と手もなく説明するので、余の空想の半分は倫敦塔を見た其日のうちに打ち壊はされて仕舞つた。余は又主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「え、

あの落書ですか、詰らない事をしたもんで、折角奇麗な所を台なしにして仕舞ひましたねえ、なに罪人の落書だなんて当になつたもんだやありません、贖も大分ありまさあね」と澄ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事と其婦人が我々の知らない事や到底読めない字句をすらく読んだ事杯を不思議さうに話し出すと、主人は大に軽蔑した口調で「そりあ当り前でさあ、皆んなあすこへ行く時にや案内記を読んで出掛るんでさあ、其位の事を知つてたつて何も驚くにやあたらないでせう、何頗る別嬪だつて？——倫敦にや大分別嬪が居ますよ、少し気を付けないと喉呑ですぜ」と飛んだ所へ火の手が揚る。是で余の空想の後半が又打ち壊はされる。主人は二十世紀の倫敦人である。

下宿の主人は、現象を常識（目に見える論理）で説明する合理主義者である。この主人は、前出相原氏により「吾輩は猫である」の迷亭の口調に酷似すると指摘されている。

中島国彦氏が迷亭を「苦沙弥と対になる人物としてまず造形され、人を驚かす人物として形象化されるが、作品の進展とともに、少しずつその想念は重くなる。次第に作者の頭の中にある思いが、迷亭の口を通して語られ始めるからである」と述べている。迷亭が作者の一面であるように、宿屋の主人も作者の一面である。つまり、目に見える論理で空想を破壊する意思是、作者の中に潜んでいることを強調しておきたい。

テクストにおける二十世紀とは、機械化が進む近代社会であり、そこで暮らす人々は自らの生活の享樂を求め、現象を常識（目に見える論理）で説明する合理主義者である。「倫敦塔」において語られる死の歴史を顧みず、現実を生きることに徹している。諸氏の言うように、「倫敦塔」は二十世紀批判を一つの主題としている。



しかし、「倫敦塔」には、二十世紀批判を行う以前に作家を書くという衝動に駆り立てたもの（「逆上の気味」）があったのではないか。そのことを明らかにするため、〈倫敦塔〉内部で描かれた空想について考察する。

2 テクストの構成 — 空想と破壊と —

〈倫敦塔〉の空想は、全て作者の創作ではない。作者の後記や先学によって、様々な原典が指摘されている。<sup>1)</sup> それらを整理すると、テキストと原典との関係は次のように分けられる。

I 〈倫敦塔〉での行動や、〈倫敦塔〉の紹介に際し、原典に沿って使用しているもの。

例 中塔、白塔、ボーション塔などの紹介

II 〈倫敦塔〉の空想において、原典を文章化した形となっているもの。

例 ドラロッシュの絵から倫敦塔の二王子の容貌を描く

III 〈倫敦塔〉の空想において原典を基盤に置きつつ、作者独自の創作をしているもの。

例 ドラロッシュの絵から倫敦塔の二王子が暗殺されることを暗示した場面。

IV 原典がない想像や原典通りであっても〈倫敦塔〉と関連性が低く、作者の創意と考えられるもの。

例 ダンテ『神曲』地獄の門

倫敦塔へ行く

倫敦塔に引き寄せられる Ⅳ

ダンテの地獄の門が見える Ⅳ

A 石橋、鐘塔、逆戟の紹介 Ⅰ

クランマー・ワイアット・ローリーの空想 Ⅱ

B 中塔に入る Ⅰ

倫敦塔の二王子現る Ⅱ

— 王子の会話、暗殺の暗示 Ⅱ

エリザベス、王子らとの対面せず Ⅱ 葦葺の貴婦人像 Ⅲ

暗殺者の懐帳 Ⅱ

暗殺場面の一致 Ⅲ ↑時計の音

C 白塔の紹介 Ⅰ ローリーの想像 Ⅱ

ビー・イーターとの会話 Ⅰ・Ⅱ

D 仕置場を通る Ⅰ ジェイン・グレイ登場 Ⅱ 鳥についての問答 Ⅲ

E ボーション塔に入る Ⅰ

暗殺場の光景 Ⅱ

仕置場の唄 Ⅲ

全についての想像 Ⅳ

F ジェイン・ダッドレー家の紋章を説明 Ⅱ

G ジェインという文字を見る Ⅰ

ジェイン・グレイ暗殺 Ⅱ 高橋と高潔な女性像 Ⅲ

ガイフォークスの想像 Ⅱ

下宿屋、主人によって空想を破壊される

構成を見ると、脈絡なく空想が書かれているのではなく、自然に空想が深化するように、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲという順番で整然と並べられている。原典通りの空想（Ⅱ）は（Ⅲ）を導き出すものとして機能している。前半の空想（二王子の暗殺に関する場面）が、時計によって壊される。福井憲彦氏によれば、「時を治めることは社会を収めること」であり、時計塔の建設から価格の低い時計（携帯する時計など）が生産

され、鉄道網が発達し、時間が人々の手に渡った。時間を身につけることは近代人としてのアイデンティティの証の一つになった。時計、つまり近代性によって空想が破壊されている。

後半の空想（鳥、ジェイン・グレイについて）は、下宿の主人、つまり作者の分身によって破壊されている。

これらを見ると、原典に基づく作者の創意の空想（Ⅲ）が壊されていることがわかる。これらの空想は、次例のように、原典であるシェイクスピアなどの世界をより悲劇的にドラマティックに描くことが特徴と言える。

シェイクスピア『リチャード三世』第4幕第1場

あ、ちょうどいいところへロンドン塔の長官が。

ブラッケンベリー様、どうかお聞かせください、

王子とその弟は元気にしていますか？

ブラッケンベリー、お元気です。ただ、申しわけありませんが、

私としてはお会わせするわけにはいきません、

そのように王から厳命を受けておりますので。

エリザベス 王ですって！ だれのことです？

ブラッケンベリー 失礼ながら、かつての摂政リチャード公のことです。

エリザベス なんて殺生な！ あの人が王の称号を！ そして

私たちが親子の愛を引き裂いて会わせぬと！ いいえ、

私は二人の母親です、だれが二人を引き離せましよう。

公爵夫人 私は二人の父親の母親です、ぜひとも会います。

アン 私は二人の義理の叔母、でも愛情においては母親です、

だから会わせてください、責任は私のちにかけて

私が負います、どうかあなたのお役目をこの私に。

ブラッケンベリー いえ、そう軽々しく役目を捨てることはできません、

誓約によって縛られておりますゆえ、どうかお許しを。

見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立っている。面影は青白く寝ては居るが、どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭しく婦人の前に礼をする。

「逢ふ事を許されてか」と女が問ふ。

「否」と気の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらんと思へど、公けの掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情売るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の内からかいつぶりがひよいと浮き上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に与へて、「只束の間を垣間見んどの願なり。女人の頼み引き受けぬ君はづれなし」と云ふ。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の体である。かいつぶりはふいと沈む。やゝありていふ「牢守りは牢の錠を破りがたし。御子等は変る事なく、すこやかに月日を過させ給ふ。心安く覚して帰り給へ」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏗然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋ねる。

「御気の毒なれど」と牢守りが云ひ放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひながら女はさめ々と泣く。

原典ではブラッケンベリー・エリザベス・公爵夫人・アンという四人の場面であるが、「倫敦塔」では牢守り・一人の女（エリザベス）の二人の場面になり、緊張感が生まれている。また、「倫敦塔」の文体が文語調であることで格調高い雰囲気醸し出され、中心人物「女」は「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」といいながら女はさめざめと泣く」といったように美しい悲劇のヒロインへと書き換えられ

ている。その他の空想もドラマティックに書き換えられており、「超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居」る場としての空想（ドラマ）が壊されていることになる。

ここで残されたのは原典がない想像や原典通りであっても（倫敦塔）と関連性が低く、作者の創意と考えられる（IV）ダンテの地獄の門と、（生）についての「想像」（囚人たちの心境にシンクロした場面）である。つまり、「空想」は壊されたが、「想像」の全ては破壊されていないことになる。ここで（生）についての想像について考える。

斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に何が苦しいと云つて所在のない程の苦しみはない。意識の内容に変化のない程の苦しみはない。使へる身体は目見えぬ縄で縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑へらるゝのは生といふ意味を奪はれたと同じ事で、その奪はれたを自覚する丈が死よりも一層の苦痛である。

彼らは遅かれ早かれ死なねばならぬ。去れど古今に亘る大真理は彼等に誨えて生きよと云ふ、あく迄も生きよと云ふ。彼等は已を得ず彼等の爪を磨いだ。尖がれる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も真理は古への如く生きよと叫く、飽く迄も生きよと叫く。彼等は剥がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二と書いた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を予期した彼等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。

「余」は、囚人とシンクロし、存在証明としての書く行為の意味を自ら問うている。これら書くという衝動の源泉は、精神衰弱扱いされ

周囲から孤立していた、自らの過去を牢獄生活となし、それでも生きていかなければならなかった漱石の存在の模索があつた。

この場面について、越智治雄氏は次のように述べている。<sup>(三)</sup>

深い内部の塔において、余は書くことにこめられた生の意味を見いだして「存在の自覚」を果たした。漱石もまた、囚人たちと同様に、書く行為とともに生をひき受けようとしているのではないか。近代文明の中で、彼らに等し漱石もすべてを奪われていたと言える。しかしここで彼はそれを奪い返しうる場所に到達しているのだ。

訪問を終えて帰途に着く余に塔が「ぬつと見上げられ」るのは、余の内部に照応して塔が巨大に変容しているからにはかなるまい。もう一つの場所を確かめて、余は日常の中に帰つてゆく。「二十世紀の倫敦人」たる下宿の主人によつて余の想念は「打ち壊はされ」るかもしれない。漱石は血の文字に等しい営みが落書にしか見えぬ現実の視点をみるん知つている。にもかかわらず、彼が作品の冒頭にしているように、「一度得た記憶」は決して消えない。「汽車も走れ、電車も走れ」、近代文明の不安に抗して、漱石の塔は「我のみは斯くてあるべし」と立っている。近代文明の中での存在の意味をとりかえて、漱石の倫敦塔再訪は終わった。

越智氏の「書くことにこめられた生の意味を見いだして「存在の自覚」を果たす」、近代文明の中での存在の意味をとらえかえず試みは、現在においても多くの論考で引用される有効な考え方である。ここで私は「美といふ文では満足が出来ない」という精神と重ねて考え直してみたい。注目したいのは、これらの書く行為について「余」が考え始めた時に登場する血のモチーフである。

## 3 血の結晶としての〈倫敦塔〉

余が想像の糸を茲迄たぐつて来た時、室内の冷氣が一度に背の毛穴から身の内に吹き込む様な感じがして覚えすぞつとした。さう思つて見ると何だか壁が湿っぽい。指先で撫で、見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると真赤だ。壁の隅からぼたりくと露の珠が垂れる。床の上を見るに其滴りの痕が鮮やかな紅みの紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思ふ。壁の奥の方から唸り声さへ聞える。

「余」が囚人たちとシンクロした時に現れる血の場面。「倫敦塔」自体が「人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である」と概念づけられていた。また、この場面のみならず、テクスト内の空想には血の描写が多く伴っている。

二王子暗殺の暗喩では、「百里をつゝむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である」とあり、現実から空想を呼び起こす手段として、血の描写が多用される。

久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思ふ間もなく、目がくらんで物の色さえ定かには眸中に写らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きて居るうちからすでに冷めたかつたであらう。鳥が一疋下りて居る。翼をすくめて黒い嘴をとがらせて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて長く此不吉な地を守る様な心地がする。吹く風に楡の木がざわ／＼と動く。見ると枝の上にも鳥が居る。暫くすると又一羽飛んでくる。何処から来たか分らぬ。傍に七つ許の男の子を連れた若い女が立つて鳥を眺めて居る。

女は白き手巾で目隠しをして両の手で首を載せる台を探す様な風情に見える。首を載せる台は日本の榎割台位の大ききで前に鉄の環が着いて居

る。台の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要領と見えた。

女は稍落ち付いた調子で「吾夫が先なら追い付う、後ならば誘ふて行かう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行かう」と云ひ終つて落つるが如く首を台の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、背の低い首斬り役が重た気に斧をエイと取り直す。余の洋袴の膝に二三滴の血が迸しると思つたら、すべての光景が忽然と消え失せた。

現実から空想を呼び起こす手段として、また〈倫敦塔〉の歴史の悲慘さを強調するために、血の描写が多用されている。漱石の〈倫敦塔〉は、血の結晶としての〈倫敦塔〉と言えよう。

ここで視点を交えたい。囚人・書く行為・血のモチーフについて、後年の「道草」にも散見される。健三は過去の生活を「牢獄生活」とし、自らを囚人とみなしている。また、自らの創作に当たっては次のように記している。

健康の次第に衰へつゝある不快な事実を認めながら、それに注意を払はなかつた彼は、猛烈に働らいた。恰も自分で自分の身体に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、また己れの病気に敵討でもしたいやうに。彼は血に餓えた。しかも他を屠る事が出来ないので已えず自分の血を啜つて満足した。

予定の枚数を書き了へた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。(百一)

作物は「自分の血を啜つて」作り上げている。つまり、自らの血が入りこんでいるのである。

「道草」だけでなく血のモチーフは漱石文学に多く登場する。加藤二郎氏は「道草」「心」に触れ「先生、健三の両者において、「書」く

という行為は、「血（心臓）」という、言わば本源的な生命性とも呼ぶべきものにかかわっている」と述べている。<sup>(10)</sup>

「宿世の夢の焼点」である〈倫敦塔〉は、二十世紀と対立する血と肉と罪の結晶であるが、その血は自らの血でもあり、書く行為と直結している。〈倫敦塔〉は自らの過去（宿命）の「焼点」でもあった。

作者は〈倫敦塔〉内で運命と宿命とに操られる人間の悲劇、死にゆく者の悲壮な美しさを濃密な空想に描き出した。しかし、作者はその〈倫敦塔〉の空想を、時計の音や作者の分身である宿屋の主人などによって意識的に破壊する。〈倫敦塔〉の空想美（運命・宿命の中で死んでゆく人々の悲壮な姿をドラマチックに描いた空間）を破壊して残ったもの、それは、作者の心情と重なるところが多かった「精神の牢獄にあっても生きねばならない」という意志ではないのか。この意志を残すために空想の世界を破壊したと考えたい。

### おわりに

「倫敦塔」は漱石の作家としての原点がつまっている重要なテクストと言える。作者は、空想の世界を志向し、悲劇の女王ジェーン・グレイや残忍なりチャード三世によって命を奪われた幼い二王子などを濃密な空想で描き出した。しかし、知識人であり、二十世紀人であった作者はその空想に浸りきることはできなかった。そのために、自ら作り出した空想を壊し、「生きねばならぬ」という意思を「倫敦塔」というテクストの中心に据える。

しかし、その破壊は不徹底でもあった。やはり空想に哀惜のある作

者は「夫からは人と倫敦塔の話しをしない事に極めた。又再び見物に行かない事に極めた」という言葉で締めくくる。更に、落語的な落ちのつけかたのような下宿の主人との会話や後記で種明かしを行うなどの過剰なエクスキューズを行っている。空想の世界を志向しながら浸りきることができず、かといってその空想の世界を完全に捨て去ることのできない作者の姿が見える。「倫敦塔」の空想の破壊には「美といふ丈では満足が出来ない」精神の萌芽を見ることが出来るが、「美といふ丈では満足が出来ない」精神が固まるまで、「破戒」が発表される一年半かかることになるのである。

### 注

- (1) 「漱石と三重吉」『解釈と鑑賞』昭57・11
- (2) 「ロマンティズム」『夏目漱石』昭62・1 岩波文庫 初出昭13・7
- (3) 「漱石の深淵」『夏目漱石』昭31・11 東京ライフ社
- (4) 「濼虚集」―夢と現実の往還―『別冊国文学夏目漱石必携』2000冬季号
- (5) 「濼虚集」の性格『『日本文学』昭47・6
- (6) 『神曲（上）地獄』山川丙三郎訳（岩波文庫 昭27・8）
- (7) 『神曲物語』野上素一郎訳著（現代教養文庫昭43・2）
- (8) 「漱石作中人物事典」『別冊国文学 夏目漱石事典』平2・7
- (9) 比較文学からのアプローチ
  - ・ 出口保夫『ロンドン漱石文学散歩』（旺文社、昭61・5）
  - ・ 塚本利明『漱石と英文学「濼虚集」の比較文学的研究』（彩流社、平11・3）
  - ・ 水谷昭夫「ロンドンの漱石」『国文学』昭50・11
  - ・ 山崎甲一『倫敦塔論』（東洋大学『文学論叢』昭50・12）
  - ・ 水谷昭夫「作品の中の英国―『濼虚集』その他」『国文学』昭53・5
  - ・ 野谷士「漱石の英文学―『倫敦塔』再考―」（『滋賀大学教育学部紀要』

- 昭54・3)
- ・松村昌家『「倫敦塔」とドラローシユの絵画』（『神戸女学院大学論集』昭54・12）
  - ・服部康喜『「倫敦塔」の内と外』（『活水論文集』昭62・3）
  - ・稲垣瑞穂『「倫敦塔」の文章について』（『日本文化研究』平2・3）
  - ・関谷由美子『「倫敦塔」―ジェーン・グレイの目』（『解釈と鑑賞』平13・3）
  - ・石井和夫『No more-oh, never more-「大鴉」と「倫敦塔」』（福岡女子大学文学部紀要『文芸と思想』平15・2）
  - ・中川浩一『文学作品と橋―「倫敦塔」を主軸にして』（『地図情報』平15・11）
  - (10) 『時間と習俗の社会史』（ちくま学芸文庫、平8・2）
  - (11) 『リチャード三世』（白水Uブックス、昭58・10）
  - (12) 『倫敦塔再訪』（『文学』昭48・4）
  - (13) 『漱石の血と牢獄』（『文学』平16・5・6）
- \*引用は全て『漱石全集』第二版（岩波書店 最新版）を用いた。傍線・文字囲いは私に付した。
- （やまね・ゆみえ、広島国際大学・鈴峯女子短期大学非常勤講師）